

氏 名 とも だ かず ひで
友 田 和 秀
学位の種類 博士 (文 学)
学位記番号 論文博第 464 号
学位授与の日付 平成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目 『魔の山』とその周辺
—— トーマス・マンと 1920 年代 ——

論文調査委員 (主 査) 教授 西 村 雅 樹 助教授 松 村 朋 彦 教授 若 島 正

論 文 内 容 の 要 旨

「黄金の20年代」と呼ばれる1920年代。それは、第一次世界大戦の終結—革命—帝政の崩壊で幕を開ける10年、ドイツが新たな時代へと足を踏み入れた10年であり、モダニズム文化にきらびやかに彩られるその背後で、最終的にはナチズムへと収斂していくような無気味さをただよわせた時代、まさに激動の、世界史の転換点ともいうべき時代であった。作家トーマス・マンはこの時代と徹底的にかかわり合い、それと対決した。その対決の結果生み出されたものが、1924年に刊行され、マン文学の最高峰のひとつに数え入れられる小説『魔の山』なのであった。1920年代という時代のただなかに聳え立つ巨峰『魔の山』。本論文は、この巨峰およびその周辺を探索することによって、『魔の山』と時代について、さらにはその作者たるマン自身と時代との関係について考えてゆこうとする試みである。それは同時に、1920年代という時代そのものに光をあてることをも意味する。

第1章では、小説『魔の山』を詳細に読み、『魔の山』という巨峰の一面を浮かびあがらせる作業をおこなう。そのさい中心となるのは、主人公ハンス・カストルプのクラウディア・ショーシャへの〈愛〉である。カストルプは、クラウディアへの本質的に〈死〉と結び合った〈愛〉をおのれの内部でどんどん増殖させてゆき、そしてそれは小説の第5章第9節「ヴァルブルギスの夜」において絶頂をむかえることになる。その後かれは小説の後半でこの〈愛〉にさまざまな角度から検討をくわえ、第6章第7節の雪山での大きな夢、第7章第4節でのクラウディアとの対話、さらには第7章第7節にあるシェーベルトの歌曲「菩提樹」についての省察といった「錬金術的高揚」に達した瞬間に、この〈死〉と結び合った〈愛〉を、「生と人間への愛」へと変容させることに成功する。この〈愛〉の変容過程が、カストルプの冒険の中心をなしているのである。その変容過程を、物語を貫く一本の軸である〈錬金術〉のモチーフをとおして読み解くのが、本論文第1章の主たる目的である。カストルプは、〈理性〉の警告者セテムブリーニの対極の世界、〈理性の限界〉を越えた世界へと足を踏み入れることによってクラウディアへの〈愛〉を深め、同時に物語の後半で同じく〈理性の限界〉を越えることによって「錬金術的高揚」に達し、〈死〉への〈愛〉を「生と人間」へと向けて昇華させる。〈理性の限界〉を越えた地点でなされる〈愛〉の変容、「錬金術的変容」、これが、物語を貫く〈錬金術〉モチーフの本質であり、マンがハンス・カストルプの物語にたくしたものであるということが出来る。

第1章で浮かびあがった『魔の山』の一面と時代との関係について考えるのが、第2章から第4章である。第2章は1920年前後のマンについて、つまり第一次大戦の終結から、一般にマンの〈転向〉と呼ばれる1922年のヴァイマル共和国支持にいたる時期についての考察である。ここではマンの保守思想の一面に目が向けられる。本章は、その一面を照らし出すことによって、マンの保守主義が第一次大戦後どのような方向に進み、〈転向〉直前にはいかなる相貌を呈していたのかということに、すなわちヴァイマル共和国支持に至るまでのマンの保守主義の内実に迫る試みである。それは同時に、第一次大戦後のアクチュアルな思想潮流のなかにしめるマンの思想的・政治的位置を精確に定位する試みをも意味する。中心となるのは、〈保守革命〉の論客のひとりであり、『第三の国』の著者でもあるメラール・ファン・デン・ブルックの思想とマンと

の関係である。第一次大戦後のマンは、メラエ的〈保守革命〉思想との強い親縁性を示しつつ反デモクラシー・反リベラリズムの立場に立って、「ドイツ的社会主義」を基底に据えた「新たなドイツ」を模索していたのであった。本章ではその模索過程ならびにマン自身による〈保守革命〉思想の克服、その政治的位相転換に照明が当てられる。

第3章は〈転向〉そのものについての考察である。マンは1922年10月の講演『ドイツ共和国について』において、これまでの反デモクラシー・反政治の立場から一転してヴァイマル・デモクラシー支持を表明する。問題となるのは、マンが支持を表明した〈デモクラシー〉、〈政治〉の意味内容である。ヴァイマル・デモクラシー支持の決定的要因は、マンがそれまで反発していたルソー流のデモクラシー、政治から、ゲーテ的な〈デモクラシー〉、〈政治〉へとその意味内容を転換した点にある。それがおこなわれたのが、1922年3月の講演『告白と教育』なのであった。そのなかでマンはゲーテを導きの糸として、「全人性」としてのフマニテート理念を獲得することによって〈精神〉と〈政治〉のジンテーゼをはたし、〈保守革命〉思想をヴァイマル・デモクラシーに向けて政治的に位相転換することに成功する。マン自身の内面的問題として捉えるならかれの〈転向〉は『告白と教育』を起点としたヴァイマル・デモクラシーへ向けての跳躍といえることができる。マン自身の内面的な自己発展が右翼勢力の増大という外的要因に方向づけられた結果、それが〈転向〉の実相だったのである。

第4章では『魔の山』と時代についての考察、つまり第1章で浮かびあがった『魔の山』の一面と、第2章、第3章で明らかになったマンの歩みとをつき合わせる作業がおこなわれる。革命、戦後の混乱のなかから「新たなドイツ」を模索し、〈転向〉によっておのれの立場をかためたマンが、自分の歩みを主人公ハンス・カストルプの歩みに投影させることによって『魔の山』は、アクチュアルな意味での〈自伝的小説〉となる。フマニテート理念の獲得による〈デモクラシー〉に向けてのマン自身の跳躍——それと同時に小説じたいも転換し、カストルプは〈死〉への〈愛〉から「生と人間への愛」へと向かう。つまり〈愛〉の〈錬金術の変容〉過程と、作者トーマス・マンの〈転向〉のプロセスとが平行関係をなしているのである。戦前の物語の主人公であるカストルプはそのことによって戦後の理念を「先取り」することになる。そして、〈愛〉の予感を胸に抱きながら戦場へと姿を消してゆくハンス・カストルプのうちに、〈転向〉後のマンが抱く「新たなドイツ」の理念がたくされるのである。

第5章と第6章は、『魔の山』を書き終えたあとの、つまり1920年代後半のマンと時代とのかかわりについての考察である。第5章ではバッハオーフェン・ルネッサンスを中心とする非合理主義的思想潮流とマンとの関係が扱われる。『魔の山』完成後のマンは、つぎの小説としてヨセフ四部作にとり組みはじめる。聖書のヨセフ神話へと向かうマンとバッハオーフェン・ルネッサンス——両者はともに、時代の大きな流れを形成していた神話というものによって本質的に規定されている。だがクラーゲスの非合理主義のあらわれであるバッハオーフェン・ルネッサンスが精神、理性を、昼の光を捨象し、ひたすら神話的な闇の世界、「ロマン主義的な母の懷」へと退却するのにたいして、マンは、神話と心理学を結合させることによって、つまり非合理の暗黒を精神の光で照らすことによって、「人間の統一」を達成しようとする。かれは、昼の世界と夜の世界とのジンテーゼを志向していたのである。そしてそれが、時代の思想潮流である非合理主義との対決過程のなかから、天上と地界双方から祝福された存在であるヨセフの物語をマンが描こうとした、根本動機だったのである。

最後の第6章では、1928年にマンがナショナリズム批判を展開したあるインタビューをきっかけにマンのまえに姿をあらわしたひとりの若者、フリードリヒ・ゲーオルク・ユンガーとマンとの関係が論じられる。マンのナショナリズム批判に強く反発したユンガーは、マンへの反論として『魔法を解かれた山』という文章をあらわす。『魔の山』をブルジョワ世界を描いた作品と切り捨てる一方で、「革命的ナショナリズム」思想の持ち主としてわきあがるような〈生〉のナショナリズムを主張するユンガー——かれは、非合理主義とナショナリズムの結節点をなしていたのである。一方マンのほうは、非合理主義が政治の世界にとり込まれ、プレナチズムの状況を呈していることに強い危機感を抱いていた。マン自身はユンガーの小論に直接反論することはない。だがマンとユンガー、このふたりを同一平面上に並べてみるならば、われわれはそこに、ヴァイマル時代全体を特徴づけていた断裂、時代が内包し、時代のダイナミズムそのものを形成していた断裂をみとめることができるだろう。同時にそこからは、いくえにも重なり合うこの断裂の一翼をになうことによって、ヴァイマル時代という時代がはらむ著しい緊張状態のなかを生き抜くマンの姿が、マンの発言だけからでは見えてこない、時代とののびきならない関係を切り結ぶマンの姿が浮かびあがってくるだろう。

第5章と第6章は、1920年代という時代をトータルに見わたすために必要なものであると同時に、『魔の山』完成直後の

時代からこの小説をふりかえって見ようとする試み、つまり『魔の山』という小説がどのように受け止められたのかということと関連づけながら、1920年代後半の時代について考えようとする試みでもある。

論文審査の結果の要旨

トーマス・マンの長編小説『魔の山』(1924)は、第一次大戦前のスイスのサナトリウムを舞台とし、主人公ハンス・カストルプがそこで遭遇するさまざまな体験を描き出した作品である。この小説は従来から、時間という哲学的なテーマを扱う「時間の小説」であると同時に、同時代の精神状況を描いた「時代の小説」でもあるという二重の意味での「時の小説」として捉えられてきた。近年のトーマス・マン研究においては、とりわけ1979年にトーマス・マンの1918年秋から1921年末までの日記が公刊されて以来、この小説をその成立史と関連づけて「時代の小説」として実証的に読み解こうとする傾向が認められる。

マンはこの小説を1913年に書き始めるが、第一次大戦中の中断をはさんで、1919年に新たな構想のもとに執筆を再開し、1924年に刊行する。この時期のマンは、1918年に刊行された長編評論『非政治的人間の考察』における反デモクラシー、反リベラリズムの立場から、1922年の講演『ドイツ共和国について』で表明されるヴァイマル共和国支持へと、その政治的姿勢を大きく転じることになり、こうしたマンの「転向」が、この小説の成立過程には影をおとしていると考えられる。本論文は、この点に関する近年のトーマス・マン研究の問題意識と成果を批判的に受けつぎ、『魔の山』とその時代との関係に新たな光を当てようとする試みである。

第1章では、綿密なテキストの読解によって、『魔の山』という複雑に入り組んだ作品の基本構造が分析される。論者は、小説の第5章第9節「ヴェルブルギスの夜」で頂点に達するカストルプのクラウディア・ショーシャへの愛と、第6章第7節で雪山に突入したカストルプが見る夢とが、ともに理性の限界を越える行為としてたがいに対応関係にあることを指摘し、この両者を結びつけるものとして、第6章第8節でナフタが語る「錬金術」のモチーフに着目する。すなわちこの小説は、魔の山という密閉された空間のなかで、死への共感を内包するカストルプのショーシャへの愛が、生と人間への愛へと錬金術的変容をとげてゆく物語として読み解かれるのである。

第2章と第3章では、マン自身の「転向」へといたる過程が考察の対象となる。第2章では、1920年前後のマンの保守思想と、「保守革命」の代表者であり1923年に『第三の国』を著すメラー・ファン・デン・ブルックとの関係が論じられる。論者は、西と東のあいだに位置する「第三の国」としてのドイツという根本思想において、1921年ごろまでのマンとメラーのあいだには強い親縁性が存在していたことを立証し、従来のトーマス・マン研究がこの点を看過していたことを批判する。こうした前提のうえに立って、1922年のマンの「転向」が、「保守革命」思想の政治的位相転換として捉えなおされるのである。第3章では、1922年10月の講演『ドイツ共和国について』へといたるマンの「転向」の過程において、1922年3月にマンがおこなったゲーテに関する講演『告白と教育』が転換点をなすものであったことが論証される。これまでほとんど顧みられることがなかったこの講演において、マンはゲーテのフマニテート(全人性)の理念を媒介にして精神と政治との統合を果たすのである。従来の研究において、マンの「転向」は、1922年6月の外相ラーテナウの暗殺という外的要因から説明されることが多かったのにたいして、論者はそれをマン自身の内的発展過程としてあとづけることに成功している。こうして、第2章と第3章で論者が示している新たな知見は、従来のトーマス・マン像に修正を迫る貴重な研究成果であるといえる。

第4章では、第1章で分析された『魔の山』の構造と、第2章、第3章で解明されたマンの「転向」とのあいだの関係が論じられる。すなわち、死への共感から生と人間への愛へと向かうカストルプの錬金術的変容過程と、フマニテート理念の獲得によるマンの「保守革命」思想から共和国支持への政治的位相転換とが、たがいに平行関係をなすものとして捉えられるのである。さらに論者は、第一次大戦前の世界を描いたこの小説の主人公カストルプが、大戦後の理念を先取りする存在でもあるという、この小説の「時代の小説」としての「二重構造化」を指摘したうえで、時間の止場をもたらす「錬金術」のモチーフが、この小説にそうした二重構造化をあたえると同時に、「時間の小説」と「時代の小説」とを統合する役割をはたしていると結論づけるのである。

第5章と第6章では、『魔の山』刊行後の1920年代後半におけるマンと時代との関係が論じられる。第5章では、バッハ

オーフェン・ルネッサンスに代表される同時代の非合理主義的思想潮流と対決しつつ、『ヨセフとその兄弟たち』(1933-43)を書きすすめることによって、神話と心理学との結合による「人間的統一」の達成をめざしたマンの歩みがたどられる。こうして『ヨセフとその兄弟たち』は、『魔の山』の延長線上に位置づけられるのである。第6章では、『魔の山』にたいする若い世代の反応の一例として、フリードリヒ・ゲーオルク・ユンガーの文章『魔法を解かれた山』(1928)が取り上げられる。従来のトーマス・マン研究がほとんど触れることのなかったこの文章のなかで、ユンガーは『魔の山』をブルジョワ的作品として退け、非合理主義的なナショナリズムを主張する。論者は、マンとユンガーという二人を同一平面上に並べることによって、時代のはらむ断裂を浮き彫りにするのである。

こうして、広範囲にわたる文献資料を渉猟し、テキストを精緻に読み解くことによって、小説『魔の山』と作者マンの思想の歩みとのあいだの平行関係を実証し、さらにそれを1920年代の思想潮流のなかに位置づけた本論文は、単にトーマス・マン研究に新しい成果をもたらすのみにはとどまらず、広く1920年代のヨーロッパの文化と社会を研究する上で貴重な示唆にとむものとして高く評価することができる。

むろん本論文にも、今後の課題としてさらに望まれる点がないわけではない。第1章から第3章にかけての入念な論証とくらべて、第4章の叙述はやや簡略にすぎるように思われる。また、第6章が最終章にしては少し全体から浮きあがった印象をあたえることも否めない。だが、こうした点も、本論文が全体としてもつ学術的価値を揺るがすものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2004年1月14日、調査委員3名が論文の内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。